

# インドネシア人看護師受け入れの現状

キーワード 外国人看護師受け入れ 現状 EPA 看護師国家試験

C棟8階 ○巽 なぎさ

高度救命救急センター 橋田 由紀

## I. 目的

当院では、EPA（経済連携協定）に基づき、国際貢献及び職場の活性化を図る目的でインドネシア人看護師候補生（以下候補生）の受け入れを開始し、今年2月より2名の候補生が、各病棟で勤務している。これまで候補生のサポーターとして支援ナース、看護学科教員、担当副部長や人事係長と、毎月の連絡会議を設け対策を講じている。彼らはあと2回国家試験を受験できるが、不合格となれば帰国を余儀なくされる。今回、これまでの当院での活動状況を報告することで、他部署の看護職員への現状を周知でき、また既に決定している第二期生の受け入れに役立てられると期待する。

## II. 受け入れ準備

- 1) 支援者定例会議の開催。
- 2) 病院利用者に対して、ポスターによる情報提供。
- 3) 配属先スタッフに対して、候補生の立場を踏まえた具体的なケアや文化・宗教的背景を配慮した候補生との関わり方の周知。
- 4) お祈りの時間と場所の確保。
- 5) 住居や各申請に対する支援。
- 6) 看護部主催の歓迎会の開催。

## III. 受け入れの経過

- 1) 就労について：今年2月16日より配属先で就労開始。受け入れから2週間は支援ナースがマンツーマンで付き添い具体的なケアを指導。3週目以降は他スタッフの付き添いのもと、ケアに従事。一日の午前中は病棟で勤務している。
- 2) 学習について：一日のうち午後からは自己学習の時間を設けている。4月～非常勤講師による国家試験対策学習(金)を開始。4月～看護学生と共に看護学科講義の試験的受講を行うが、7月中止し、8月～看護学科教員による領域別個別授業(月)を開始する。その他学生ボランティア、支援者による学習支援。国際交流センターでの個別日本語学習(週2回)を行っている。

## IV. 受け入れの現状

1) ケアや他業務と患者の反応：受け入れ当初の2週間は支援ナースが、各科外来・検査部門の意味と場所の説明、清潔ケアを含む患者への声かけのシミュレーションを行い、以降の病棟業務に対するイメージ化ができた。インドネシアでのケアの経験もあり、ある程度実施が可能で患者からはケアが丁寧であると喜ばれ、受け入れはスムーズな印象であった。

2) 配属先スタッフの反応：どのような日本語を使用すれば彼らが理解できるのか、時間をかけ伝えようと努力している。候補生に対する患者の反応が良いことやスタッフが候補生の文化に触れることで、職場は活性化している印象である。

3) 候補生の反応：日本人の看護師と同等の業務ができないことに対する苛立ちや、自己の看護技術が衰えることへの不安を抱いている。また、今年度に受験した国家試験、模擬試験を重ねる毎に合格への希望が薄れている様子である。

4) 日本語の会話・理解能力：患者への声かけやスタッフとの言葉のやり取りで障害がある。複雑な内容や方言を含む会話は、聞き取ることも難しいが、現在は2人の候補生の間で能力に差があるものの、はっきりとした口調で明確な言葉や標準語を用いれば、ほぼ理解は可能な状態である。

5) 支援ナース：支援ナースとしての役割が発揮できないことに対してもどかしさを感じている。4月にAOTS（(財)海外技術者研修協会研修センター）で行われた、他施設との経験交流会では、多くの受け入れ施設が日本語学習と国家試験対策についての効果的な学習方法に頭を抱え、試行錯誤していることが明らかになった。また、両国間における医療システム、看護概念や技術、資格の取得方法などに差異があり、これらの情報が不足し相互理解が困難であると感じている。

6) 国家試験対策：インドネシア語での模擬試験でも、結果は合格に及ばなかった。使用教材や教育方法に、

全国で一律に定められた指針がなく、独自の方法で模索しながら進めているが、候補生の学習に確保できる時間や、人材・経済面にも問題を抱えているのが現状である。

## V. 考察

候補生にとっての一番の課題は、日本の看護師免許の取得である。また受け入れる私達としても初めての試みであり、外国人と共に働くということを受け入れると共に彼らの国家試験合格に向けた対策が重要課題である。残された期間は一年余りであり、期間内に国家試験の合格を目指すには、努力や工夫を積み重ねる必要がある。また、受け入れ施設側に候補生の支援方法をすべて委ねられているのが現状であり、候補生らの模擬試験や日本語能力にも既に差が生じている。当院でも様々な支援者の協力を受け、毎月の支援者定例会議で状況の報告や学習法の検討を行い、日々最善の方針を模索している。特に日本語の習得については、個々の能力に応じた適切な方法を見出すことに苦慮しており、専門用語習得を含めてさらなる難航が考えられ、今後とも期待に応えられるだけの体制づくりが必要である。

## VI. 結論

以上のことから、今後は施設間での情報交換を通じて、院内の体制の整備を行い最善の方法を構築し続けることによって、結果的に国家試験合格を達成することができればと考える。